

〈論文〉

D. F. サルミエントのオリエンタリズム

——『ファクンド』における「野蛮」表象をめぐる——

花 方 寿 行

はじめに

アルゼンチンの政治家・教育者・文筆家であったドミンゴ・ファウスティーノ・サルミエント（1811-88）の代表作『ファクンド—文明と野蛮』（1845）は、様々な意味でラテンアメリカ文学・文化史において重要な位置を占めている。J. M. ロサスによる独裁制を逃れた亡命先チリで書かれたこの作品は、彼の生地サン・ファン出身のカウディーリョ、ファクンド・キローガの伝記という形を取り、ロサス政権をはじめとするカウディリスモ批判を目的として書かれた。サルミエントはカウディーリョを生み出す原因をアルゼンチン内陸部の広大なパンパと、この土地がそこに住む gaucho に与える影響に求める。彼によればパンパこそがアメリカの野蛮さの元凶であり、ブエノス・アイレスを中継地として伝わってくるヨーロッパ文明に敵対し、これを破滅させようとする動きの源である。

この作品の副題にいう「文明」はヨーロッパ文化、特に啓蒙主義とロマン主義を、「野蛮」は gaucho 的な「遅れた」アメリカの生活様式を意味する。サルミエントは原則的には「野蛮」こと gaucho とカウディーリョを否定し、アルゼンチンのヨーロッパ・「文明」化を主張する。しかし彼のディスクールは、単純な二項対立に収まっていない。アンデルソン・インベルはサルミエントの「文明」と「野蛮」をめぐるディスクールの曖昧さを、次のように簡潔にまとめている。「この弁証法はあまりにも単純な

ため、サルミエント自身にとってすら不十分で、ためにこの書一巻を通して、彼はこれをパラドックスや、飛躍や留保によって複雑にしなければならず、ついにはそもそもの理論に矛盾をきたすに至っている。平原はそれほど野蛮ではなく、都市はそれほど文明的ではない。その上、サルミエントは政治的原則の名において軽蔑する gaucho の風俗に、美的見地から親しみを抱いている¹⁾。その結果この作品は、パンパの伝統的な生活様式を否定するヨーロッパ中心主義の代表作として取り上げられるだけでなく、それまでヨーロッパ文学の模倣にとどまっていたラテンアメリカ文学において、初めてアメリカ独自の風俗を文学の題材として扱うことを重要視した作品という正反対の評価も受ける結果となっている。

拙論においては、サルミエントの野蛮批判のディスクリールに見られるオリエンタリズムを分析することによって、この「矛盾」が何によって生じてくるのかを明らかにしたいと思う。

なお、今回拙論においては紙幅の関係もあり、考察の対象は『ファクンド』冒頭の二章にほとんど絞られてしまっている。これらの章においてサルミエントは、ファクンド・キローガの伝記的記述に先立ち、十九世紀を通してアルゼンチンを揺るがし続けた統一派と連邦派の内戦の原因を、アルゼンチンの自然・社会を鳥瞰することによって明らかにしようとしている。全体の六分の一にも満たない部分ではあるが、このパートが後に記述される歴史の枠として機能しており、従来矛盾していると思われてきた彼のディスクリールの二つの側面をカバーしていることを考慮すれば、『ファクンド』全体に適用可能な結論を導き出せるものと考えている²⁾。

1 「野蛮」としての「アジア」

『ファクンド』第一章の内容は、「アルゼンチン共和国の自然環境と、それによって産み出される性質、習慣と思想」というその表題に要約されている。序において既にサルミエントは、思想・政治が自然環境と密接に結びついていることを主張している。

Pero Facundo, en relación con la fisonomía de la naturaleza grandiosamente salvaje que prevalece en la inmensa extensión de la República Argentina; Facundo, expresión fiel de una manera de ser de un pueblo, de sus preocupaciones e instintos; Facundo, en fin, siendo lo que fue, no por un accidente de su carácter, sino por antecedentes inevitables y ajenos de su voluntad, es el personaje histórico más singular, más notable, que puede presentarse a la contemplación de los hombres que comprenden que un caudillo que encabeza un gran movimiento social, no es más que el espejo en que se reflejan, en dimensiones colosales, las creencias, las necesidades, preocupaciones y hábitos de una nación en una época dada de su historia.³⁾ (しかしファクンドは、アルゼンチン共和国の果てしない広がり的大部分を占める壮大なまでに野蛮な自然の様相との関連においてみられるべきである。ファクンドは、ある民族のあり方の、その関心事や本能の忠実な表現である。ファクンドは、つまるところ、あのような人物であったわけだが、それはたまたま彼の性格としてそうであったわけではなく、不可避の事情により彼の意志にかかわらず、最も特徴的な、最も際立った、歴史上の人物だったのであり、それゆえカウディーリョが社会の大きな変動を司っていることを理解する人間の熟視に対しては、彼は単なる一枚の鏡、ある国の歴史上のある時代における信条や、必要や、関心事や習慣を、巨大なスケールで反映する鏡として立ち上がってくるのである。)

かくして第一章は、アルゼンチンの国土全体の総観で幕を上げる。続いてその大部分を占めるパンパが描写される。サルミエントは平原の広大さと、それに反比例するかのような人口密度の低さに注目する。それはすなわちパンパの住民たちが、都市の住民と異なり、常に猛獣などの危険にさらされ、緊張状態に置かれていることを意味する。

La inmensa extensión de país que está en sus extremos, es enteramente despoblada (. . .). El mal que aqueja a la República Argentina es la extensión: el desierto la rodea por todas partes, y se le insinúa en las entrañas; la soledad, el despoblado sin una habitación humana, son, por lo general, los límites incuestionables entre unas y otras provincias. (. . .). Al sur y al norte, acéchanla los salvajes, que aguardan las noches de luna para caer, cual enjambres de hienas, sobre los ganados que pacen en los campos y sobre las indefensas poblaciones. (. . .). Si no es

la proximidad del salvaje lo que inquieta al hombre del campo, es el temor de un tigre que lo acecha, de una vibora que puede pisar.⁴⁾ (この国の周辺部の広大な地域は、完全に無人である(中略)。アルゼンチン共和国を苦しめる害悪は、広大さである。荒野はあちらこちらでこの国を取り巻き、その腸に入り込んでいる。孤独、人間の住居の一つとしてない無人地帯が、一般に、県と県を分けるいかんともしがたい境界となっている。(中略)南部と北部ではこの国を蛮族が窺い、月夜を待って、ハイエナの群のように、野に草をはむ家畜や無防備な集落に襲いかかる。(中略)地方の人間を脅かすものが蛮族の接近でなければ、それは彼を待ち伏せる虎か、踏みつけるやもしれぬ毒蛇の恐怖である。)

ここではインディヘナが猛獣と同じく、自然の脅威の一部として扱われているのに、留意していただきたい。このような危険に満ちた生活は、そこで生活する人間に独特の気質をもたらす。

Esta inseguridad de la vida, que es habitual y permanente es [sic. en] las campañas, imprime, a mi parecer, en el carácter argentino, cierta resignación estoica para la muerte violenta, que hace de ella uno de los percances inseparables de la vida, una manera de morir como cualquiera otra (...) ⁵⁾ (このような生活の不安定さは、平原地方においては日常のかつ恒常的なのだが、私のみるところ、アルゼンチン人の性格に暴力的な死に対するあるストイックな諦めの姿勢を刻み込んでおり、彼らはそのような死にざまを生活から切り離せぬ災厄の一つ、他と変わらぬ一つの死に方と見なしているのである。)

サルミエントはこのような内陸部を、ブエノス・アイレスを中心とする港湾部に成立した大都市に対置する。そして文明—野蛮、ヨーロッパ—アメリカ、都市—パンパ、知識人—ガウチョという基本的な対立図式が明確にされた後に、突如としてオリエント・イメージが内陸部の表象として登場する。

Esta extensión de las llanuras imprime, por otra parte, a la vida del interior, cierta tintura asiática, que no deja de ser bien pronunciada. Muchas veces, al salir la luna tranquila y resplandeciente por entre las yerbas de la tierra, la he saludado maquinalmente con estas palabras de Volney, en su descripción de las Ruinas: *La pleine lune à l'Orient s'é-*

levait sur un fond bleuâtre aux plaines rives de l'Euphrate. Y, en efecto, hay (...) algun parentesco en la tropa de carretas solitaria que cruza nuestras soledades para llegar, al fin de una marcha de meses, a Buenos Aires, y la caravana de camellos que se dirige hacia Bagdad o Esmirna. (...)

(...) Es el capataz un caudillo, como en Asia, el jefe de la caravana (...).

(...) Si los bárbaros la asaltan, forma un círculo, atando unas carretas con otras, y casi siempre resisten victoriosamente a las codicias de los salvajes, ávidos de sangre y pillaje.

La árrea [sic.] de mulas cae, con frecuencia, indefensa en manos de estos beduinos americanos, y rara vez los troperos escapan de ser degollados.⁶⁾ (この平原の広がりは一方で、内陸部の生活に、あるいは言い難いアジア的な色彩を加えている。しばしば、静かに輝く月が大地を覆う草の間から昇る時、私は月に「廢墟」の描写におけるヴォルネーのこの言葉を機械的に捧げたものだ。「オリент風の満月がユーフラテスの平坦な岸の上青き夜空を背景に昇る」そして、実際、(中略) 我らが人気なき大地を渡り、数ヶ月行進して、ブエノスアイレスへ到達しようとする孤独な隊商と、バグダットやエスミルナへ向かう駱駝のキャラバンには、ある共通点があるのだ。(後略)

(前略) 隊商の頭がカウディーリョだが、アジアでは、キャラバンのリーダーがこれに相当する。(後略)

(前略) 野蛮人どもが隊商を襲ってきた場合には、荷馬車を互いに繋ぎ合わせて円陣を組み、血と略奪に飢えた野蛮人の貪欲に対してほとんど常に耐え抜き、勝利を収めるのである。

荷を負ったラバの隊列も、しばしば、身を守るすべもなくこのアメリカのベドウィンの手に落ちるが、牧童が喉をかつ切られずに逃げおおせることは滅多にない。

ここで名前の挙がっている「ヴォルネイ」とは、コンスタンタン・フランソワ・C. ヴォルネイ伯爵 (1757-1820)。フランス革命時には憲法制定議会議員、国民議会議員を歴任するも、ジャコバン党支配下では投獄の憂き目に遭い、王政復古後上院議員に復職、ルイ十八世から伯爵位を与えられた人物である。しかしながら、彼の重要性はその国内政治における活動にあるわけではない。彼は E. W. レイン (1801-1876) や J. E. ルナン (1823-1893) に先行する、十八世紀後半の代表的オリエンタリストなの

である⁷⁾。ヴォルネイは1783年から1787年にかけてのエジプト・シリア旅行の経験に基づいて、オリエントに関する幾つかの著作を残した。ここで引用されている『遺跡、あるいは帝国の転変についての思索』(1791)は、その代表的な作品である。これは地理的な非西洋としての「オリエント」を歴史的な非近代と同一枠の中で論じようとする、典型的なオリエンタリストの作品であり、後に分析する『ファクンド』のオリエンタリズムに大きな影響を与えたものと考えられる⁸⁾。

さて、この長い文章は、アナロジーによって支えられている。サルミエントはまず地理的環境としてのパンパを眺める。それは彼にアジアを、正確にはアジアについての記述を思い出させる。サルミエントにとって外観の類似は本質の共通性を意味する。パンパの外観はアジアに似ている、故にパンパとその住民はアジア的性格を持つのだ⁹⁾。同様にパンパを旅する隊商は、中東の砂漠に行くキャラバンと視覚的に、それゆえ本質的に同一のものに見なされ、カウディーリョは即自的にキャラバンの隊長となる。パンパの生活の「野蛮さ」は、かくしてその「アジア的性格」によって証明される。この論法は、ヨーロッパとの比較においてオリエントの後進性、「野蛮さ」を提示する西欧オリエンタリズムの権威を前提として要求する。ヴォルネイの著作の唐突な引用は、この権威への言及に他ならない。

ところでこの文章においては、このアナロジーの多用によって、「野蛮」と呼ばれる対象に微妙なずれが生じている。すなわち隊商を襲う「野蛮人」の存在である。サルミエントはここで、キャラバンを襲うベドウィンになぞらえられたインディヘナをも「野蛮」と呼ぶことによって、ガウチョという「野蛮」の外側にもう一つの「野蛮」を作り出してしまっている。この「野蛮」がガウチョを指すのか、インディヘナを指すのかについての曖昧さは、やがて第二章で大きな役割を果たすことになるのだが¹⁰⁾、ここではインディヘナが、先の引用文と同じく、ガウチョを取り巻く自然環境の一要素として扱われているので、ディスクールを混乱させるには至っていない。

オリエント・イメージは、地方都市と周囲のパンパの関係を表象する際にも用いられている。

La ciudad es el centro de la civilización argentina, española, europea; (...)

La ciudad capital de las provincias pastoras [sic.] existe algunas veces ella sola, sin ciudades menores, y no falta alguna en que el terreno inculto llegue hasta ligarse con las calles. El desierto las circunda a más o menos distancia: las cerca, las oprime; la naturaleza salvaje las reduce a unos estrechos oasis de civilización, enclavados en un llano inculto, de centenares de millas cuadradas (...) ¹¹⁾ (都市はアルゼンチンの、スペイン的、ヨーロッパ的文明の中心である。(後略)

牧畜を主体とする県の首都は、時には、より小さめの都市が周囲にないままに、孤立して存在しており、所によっては未開拓の土地が通りにそのままつながってさえいる。距離に程度の差こそあれ荒野がこれらの都市を取り巻き、囲い込み、押さえつけている。野蛮な自然がこれらを、何百平方マイルもの未開拓の平原に釘付けにされた、狭苦しい文明のオアシスにまで縮小してしまっている。

文明の中心としての地方都市はオアシスに、パンパは砂漠になぞらえられている。しかしこのように中近東を思わせる描写が続くからといって、サルミエントのオリエントが具体的な知識に基づいていると考えては、誤りになる。

Ya la vida pastoril nos vuelve, impensadamente, traer a la imaginación el recuerdo del Asia, cuyas llanuras nos imaginamos siempre cubiertas, aquí y allá, de las tiendas del calmuco, del cosaco o del árabe. La vida primitiva de los pueblos, la vida eminentemente bárbara y estacionaria, la vida de Abraham [sic.], que es la del beduino de hoy, asoma en los campos argentinos, aunque modificada por la civilización de un modo extraño. ¹²⁾ (牧畜生活は、思いもかけず、私たちの想像世界にアジアの記憶を蘇らせる。私たちの想像するアジアの平原は常に、どこもかしこも、カルムークや、コサックや、アラブ人のテントに覆われている。村落の原始的な生活、明らかに野蛮で遊牧的な生活、アブラハムの生活、それは現在のベドゥインの生活でもあるのだが、それがアルゼンチンの平野に、奇妙な形で文明によって修正を加えられてはいるが、姿を現しているのだ。)

「想像世界」「想像する」という表現の繰り返しに注意していただきたい。サルミエントにとってのオリエントは実在ではなく、想像上の存在なのだ。フリオ・ラモスはこの箇所と言及しながら、サルミエントのオリエントがサイードのいうオリエンタリズム的アルシヴに依拠した、空想的なものであることを指摘している¹³⁾。このオリエンタリズム的アルシヴは、地理的に曖昧なだけではない。カルムーク、コサック、アラブ、ベドウィンといった名称と並んで、聖書の登場人物であるアブラハムの名前が挙げられているように、強い家父長制というガウチョの家族形態が、時間枠を飛び越えて、非「近代」を一つに束ねてゆく。

El caudillo argentino es un Mahoma, que pudiera, a su antojo, cambiar la religión dominante y forjar una nueva.¹⁴⁾ (アルゼンチンのカウディエーリョは自分の気まぐれで支配的な宗教を変え、新しいものをでっち上げることさえできたマホメットの同類なのだ。)

Es, en fin, algo parecido a la feudalidad de la Edad Media, en que los barones residían en el campo, y desde allí, hostilizaban las ciudades y assolaban las campañas; pero aquí faltan el barón y el castillo feudal.¹⁵⁾

(これは、つまるところ、中世の封建制に似たもので、あの時代には男爵たちが農村部に住み、そこから都市に敵対したり野を荒らしたりしたものであった。ただここには男爵と封建時代の城郭が欠けている。)

Pero lo que presenta de notable esta sociedad, en cuanto a su aspecto social, es su afinidad con la vida antigua, con la vida espartana o romana, si por otra parte no tuviese una semejanza radical.¹⁶⁾ (しかし社会的な側面においてこの社会を特徴づけているのは、スパルタやローマの生活のような、古代の生活との類似性だが、一方では根本的な相違点もある。)

サルミエントのオリエントは、社会関係における封建制、家族形態としての家父長制、そして生産手段としての牧畜をその特長とし、非ヨーロッパの総称として地理的にはアルジェリアやトルコからモンゴル、東南アジアを経て日本までをカバーし¹⁷⁾、非近代的な社会形態として古代・中世と

同列に扱われる。すなわち彼にとっての「オリент」は、具体的な対象を指示する記号ではなく、広くは「野蛮」として呈示される一連のパンパのメタファーの一つなのである。

ここまではサルミエントのオリент・イメージを利用した「野蛮」表象は、批判的なものとして首尾一貫している。続いては彼のアメリカ賛美の代表的記述とされる第二章に移り、彼のディスクールの別の面を考察することにしよう。

2 審美対象としてのアメリカ

第二章「アルゼンチンの独自性と性質」は gaucho の生活やパンパの風景の審美対象としての意義を高く評価する部分で、『ファクンド』の中でも最も有名な章であり、ここだけピックアップされて論じられることも多い。しかしながら反カウディリスモ、反 gaucho 的生活を訴えるこの作品全体の政治的意図を無視して、この章だけを取り上げて、サルミエントの gaucho 生活へのシンパシーを過大評価するのは、単純すぎる発想だといわざるを得ない。フェルナンド・アレグリーアの述べるように、文学的にはいかに gaucho 的生活に惹かれていようと、彼は「政治的論争においてはためらうこともなければ、巧みな言い回しをしようとかだわりもしなかった。ロサスは野蛮なカウディーリョで、ファクンドは文明の進出を妨げるべく持てる限りの野蛮な兵士たちを投入してきた、パンパの暴力的勢力なのだ。」¹⁸⁾

ここで問題となるのは、『ファクンド』全体の趣旨に反しているとも見えるこの第二章が、サルミエントのディスクールの中であって、どのような位置を占めているのかである。これは「欧化主義者」の仮面を被ったサルミエントの思わず漏れてしまった本音なのだろうか？ それとも彼の思考はここにおいても一貫したものなのだろうか？ この疑問に対する答えもまた、彼のオリエンタリズムに注目することによって得ることができる。

第二章は、この有名な一節から始まる。

Si de las condiciones de la vida pastoril, tal como la ha constituido la colonización y la incuria, nacen graves dificultades para una organización política cualquiera y muchas más para el triunfo de la civilización europea, (. . .) no puede, por otra parte, negarse que esta situación tiene su costado poético, y faces dignas de la pluma del romancista. Si un destello de literatura nacional puede brillar momentáneamente en las nuevas sociedades americanas, es el que resultará de la descripción de las grandiosas escenas naturales, y, sobre todo, de la lucha entre la civilización europea y la barbarie indígena, entre la inteligencia y la materia (. . .)¹⁹⁾ (確かに植民地化と怠慢が作り上げた現在の牧畜生活の条件が、社会のいかなる政治的組織化に際しても、ましてやヨーロッパ文明の勝利のためにはなおさら、多大な困難をもたらしているのだが、(中略)一方この状況には詩的な側面、ロマン主義者の筆に相応しい面があることも否定できない。もしアメリカの新しい社会に瞬時にして国民文学の輝きが放たれるようなことがあるとすれば、それは壮大な自然の風景の描写と、なによりも、ヨーロッパ文明とインディヘナの野蛮さの、知性と物質との闘いの描写から産み出されるものであろう。)

この一節はそれまでヨーロッパ文学の模倣に汲々としていたラテンアメリカに、その独自の文化と社会を描くことによってこそ新しい文学・芸術作品を生み出せるのだと訴えかけた、文学的アメリカ主義のマニフェストとしてあまりに有名である。さて、この文章には注意すべき点が幾つかある。まずは社会的・政治的な困難と対比された「詩的な側面、ロマン主義者の筆に相応しい面」という表現。これはこの章で取り扱われるテーマが、政治的なものから芸術的なものへと移行したことを示している。これによって他の章では政治的理由から否定されてきた gaucho 的生活の賛美が、さほど無理を伴わずに可能となる。しかしこの言葉でサルミエントが芸術と政治を完全に切り離したと考えては、間違いになる。彼が gaucho 的生活の審美的側面を称揚するのは、それが「国民文学」の形成に役立つからである²⁰⁾。

フランス革命以後の近代国家にとっては、その地理的領域内部におけるナショナル・アイデンティティーの形成は重要な課題の一つであった。アルゼンチンが近代国家として自らを定義するためには、独自の存在として

の「アルゼンチン人」を同時に産出しなければならない。「国民国家」には外部の集団とは区別された「国民」が不可欠なのだ²¹⁾。そのためにサルミエントは、アルゼンチンの文化的独自性を表すものとして、社会・産業の近代化においては障害となるパンパやガウチョの存在をあえてクローズアップしたのである。

しかしアルゼンチン共和国全体を統一するナショナル・アイデンティティーの確立を目指す以上、その内部における分裂・対立はできる限り隠蔽されなければならない。統一派であるサルミエントにとっては、アルゼンチンは政治的にも文化的にも不可分の全体である。国家の内部に都市とパンパという二つのアイデンティティーを作り出してしまえば、かえって連邦派を利する結果になりかねない。これは一見「文明」による「野蛮」の教化というサルミエントのテーゼと矛盾するように思えるかもしれない。しかし彼にとってこの二つは、混じり合うことによってアルゼンチンを形成するべき二つの要素であって、どちらか片方が他方を支配すればいいのではない。両者は一つのネーションの二つの側面なのである²²⁾。そこで彼は、第二章から慎重に都市を排除する。この章では、「ガウチョ歌手」に関する記述の一部を除いて、都市とパンパの対立や内戦に対する言及はなされない。ガウチョの世界は、限りなく自己完結したものとして提示される。第一章で国家を二分していた対立関係は、かくして一時的に解消されるのだ。

もう一つなされる変更が、「文明と野蛮」の指示対象の変化である。引用文中にも「文明」と「野蛮」という言葉はでてくる。しかしながら、これは第一章におけるものとは異なり、都市とパンパを指しているのではない。ここでの「文明」と「野蛮」は白人入植者、具体的には辺境地帯に住むガウチョとインディヘナである。サルミエントは、入植者とインディアンの争いを扱ったアメリカ合衆国の作家 J. F. クーパーを、ラテンアメリカ作家の手本にすべき存在として賞賛する²³⁾。先に指摘した「野蛮」の指示対象の曖昧さが、ここでは巧みに利用されている。引き続きラテンアメ

リカ独自の文学の嚆矢として挙げられるエチェベリーアの詩『虜囚』(1837)は、実際インディヘナと入植者の争いを扱った作品である。

かくして第一章とは異なるコンテキストの下に組み替えられた、アルゼンチンのナショナル・アイデンティティーとしてのパンパ及び gaucho が導入される準備が整った。サルミエントは続いてクーパーの描くフロンティアと gaucho の生活の共通点を指摘し、パンパの壮大な風景²⁴⁾、gaucho の音楽的才能といったロマン主義的な題材を前面に出す。そして有名な「追跡者」「案内人」「ならず者 (gaucho・マロ)」「gaucho 歌手」の四つの代表的な gaucho のタイプ別紹介がなされる。この四タイプは後に登場する人物の性格を分類するための枠組みとして機能するのだが、このように対象をタブローとして提示し、これを一方的に観察する立場を確保することの政治的意味について、フリオ・ラモスはフーコーを援用しながら、次のように指摘している。「個別的なものから『活人画』へ。(中略) 独立したもの、個別的なものは、一般的なタブローとして機能する場合のみ意味を持ち、一方この一般的なタブローはかわりに個別なものの解釈を可能にする。(中略) タブローは、野蛮の異質性をディスクールの秩序に従えようとする企図に対応する、秩序化のプラクシスの結果として、まさに生じているのである。(中略) 他者を表象しなければならない。(中略) 他者を屈服させ、その声の不規則性に形式の暴力を行使しなければならない。野蛮を表象する事は、サルミエントにおいて、これを『文明』の法則の一般性に服従させるために囲い込もうとする欲望を前提としている。そしてこの法則は、『文明』的であると同時に、合理化された『生産的な』ものであり、発展しつつある市場の必要条件の影響下に置かれている」²⁵⁾ この章において、これらパンパの住民たちと都市との衝突が描かれないうのは、彼らをあくまで完結したタブローとして提示する上でも役に立っている。

それでは画面上から排除された都市は、どこへ移動されたのだろうか？ サルミエントは、第一章とは反対に、「野蛮」ことパンパの魅力にとりつ

かれ、「文明」の代表たる都市を否定し、消去してしまったのだろうか。そうではない。パンパと gaucho を対象化し、その詩的価値を評価する語り手及び読者は、この章で提示される活人画の内部には存在し得ない。「我々」は画面の外に、画面を見るものとして存在しているのだが、まさにそこそそが都市の占める位置なのである。

やや後、第八章においてサルミエントはこう述べている。

¿Por qué usamos hoy la barba entera? Por los estudios que se han hecho en estos tiempos sobre la Edad Media: la dirección dada a la literatura romántica se refleja en la moda. ¿Por qué varía ésta todos los días? Por la libertad del pensamiento europeo; fijad el pensamiento, esclavizadlo, y tendréis vestido invariable: así en Asia, donde el hombre vive bajo gobiernos como el de Rosas, lleva desde los tiempos de Abraham, vestido talar.²⁶⁾ (なぜ今日我々は一面に髭を生やすのか? 近年達成された中世に関する研究ゆえにである。ロマン主義文学に与えられた方向性が、モードに反映しているのだ。なぜモードは毎日変わるのか? ヨーロッパの思考の自由さゆえにである。思考を固定し、奴隷化したまえ、諸君の服装は変わらなくなるだろう。それゆえにアジアでは、ロサスのもののような政府の下で人が生活しているので、アブラハムの時代から変わらず踵までの長衣をまとっているのだ。)

「近代人」は、ロマン主義的嗜好ゆえに、中世に、オリエントに、「野蛮」に魅力を感じる。しかしそれは政治的レベルにおいてはではない。ロマン主義、すなわちヨーロッパ近代を通過した人間にとって、gaucho は、オリエントや中世同様、もはや「文明」に対して何ら危険をもたらすことのない、自在に消費され交換されるモードと化しているのである。第二章において唯一都市とパンパの闘争についての言及がなされるのが、「gaucho 歌手」の節なのは、従って必然的である。

El Gaucho cantor es el mismo bardo, el vate, el trovador de la Edad Media, que se mueve en la misma escena, entre las luchas de las ciudades y del feudalismo de los campos, entre la vida que se va y la vida que se acerca.²⁷⁾ (「gaucho 歌手」はまさしく中世のバルドやバーテ、トロヴァドールであり、都市と地方の封建制との間、去りゆく生活様式と

来たりつつある生活様式の間で行われている闘いの間を縫って、同じような情景の中を移動しているのだ。)

『ファクンド』執筆時においてロサスを代表とするカウディーリョたちが依然権力を握っていたということは、ここでは問題ではない。サルミエントのディスクールそれ自体が、ガウチョを滅びつつある存在、支配下に置かれつつある勢力として表象する事によって、現実を囲い込み、折伏する役を担っているのだ。これは彼が範を取ったクーパーのインディアンに対する態度と同一であった²⁸⁾。

それにしても、『ファクンド』でノスタルジーさえまじえてガウチョを描くサルミエントにしても、『モヒカン族の最後』(1826)を代表とする一連の作品において、時代の変化と共に去りゆく文明・生活様式としてインディアンやフロンティアを描いたクーパーにしても、現実においては依然彼らの代表する「文明」に対する恐るべき脅威であったはずの「野蛮」勢力を、なぜにかくもたやすく「滅び行くもの」として提示できたのだろうか？ それを可能にしたのも、彼らのディスクールが利用したオリエンタリズムである。先に指摘したように、オリエンタリズム的アルシーヴにおいて「非ヨーロッパ」的政治勢力は、その個別的な特徴を無視され、いずれもひとからげに「非近代」としての古代や中世と同一視される。これによって彼らは、時代の主流である進歩主義的歴史観からすれば、近代に必然的に取って代わられ、消滅せざるを得ない存在として表象されるのである。ガウチョもインディアンも、オリエンタリズム的アルシーヴの利用によって、まずディスクール上で葬り去られる。しかもこのディスクールは、個別のテクストとしての説得力しか持たないわけではない。サルミエントらのこのアルシーヴへの言及は、ヨーロッパの文学的・政治的・科学的ディスクールへの参照にとどまらず、同時にそれと連動するヨーロッパ列強による非ヨーロッパ地域の植民地化の進行という巨大な流れからも力を得ることを可能にする。サルミエントらのディスクールに正面から対抗しようとする者は、それゆえ、ヨーロッパ中心主義やコロニアリズム全体を

向こうに回して論陣を張るといふ、極めて不利な立場に追い込まれてしまうのである。

かくしてサルミエントの美学的要求と政治的要求は一致する。パンパについて、 gaucho について、ファクンドやロサスについて、「野蛮」について書くことが必要なのだ——それを都市に、「文明」に併合し、アルゼンチン共和国のナショナル・アイデンティティーの中にかくるべく位置づけ、揚棄するために、まずそれを対象化する必要があるのだ。そのために書かれたのが、この『ファクンド』一巻なのである。フリオ・ラモスや林みどりが指摘しているように、『ファクンド』は gaucho に関する記述やフォークロアを後世に残す役を担うことになるのだが、これは「野蛮」を批判的に捉えるサルミエントの意図に反する結果ではない²⁹⁾。彼が gaucho を民衆の、そして知識人の記憶から抹消すべく活動したのではないことは、パンパの生活をアルゼンチン国民文学の出発点と位置づけていることから明白である。彼はヨーロッパ的・都市的文化／ディスクールとアメリカ的・ gaucho 的文化／ディスクールの混じり合ったものとして、新たにアルゼンチン的な文化／ディスクールの築き上げようとしたのである。その意味ではラモスの言うディスクール「それ自体の野蛮化」³⁰⁾こそまさにサルミエントの望んだものだったのである³¹⁾。

3 結びに

以上考察してきたように、従来ラテンアメリカの独自性に対する矛盾した評価を示していると思なされがちであった『ファクンド』は、実際には対立する諸勢力を統合・揚棄し、近代国家としてのアルゼンチンのナショナル・アイデンティティーを創出しようとする意図において、きわめて首尾一貫した作品である。もちろん『ファクンド』のディスクールには、これまでの作業では整理しきれない矛盾や混乱がまだ多く残されている。しかしそのような問題点も、国内政治的（反ロサス・反連邦派）、社会的（パンパへの植民や工業化の促進、ヨーロッパ系移民の奨励）、美学的

(ロマン主義の愛好), ナショナリズム的 (国民文学の創出) といった多様なサルミエントの目標に即して分析するならば, よりわかりやすいものとなるだろう。

これから先のサルミエント及び十九世紀ラテンアメリカ思想史研究における方向性としては, 次のようなものが挙げられる。まずはオリエンタリズム的アルシーヴが, ラテンアメリカにおいてどのように利用されてきたか。注でも指摘したように, ロドの『アリエル』をめぐる論争も, この観点からの更なる分析が望まれる。第二に, 「文学」「政治」という分類に拘らず, 広く啓蒙主義・ロマン主義と関わるディスクールの分析を行うことによって, ラテンアメリカの知識人たちがどのようにヨーロッパ思想を取り込んでいったかを明らかにする作業がある。本文や注で指摘したように, フランス革命前後の政治的ディスクールは, 崇高美学やロマン主義といった美学的ディスクールと, 密接なつながりを持っている。ラテンアメリカでもこの状況には, かわりがなかったと考えられる。文学作品が扱うテーマに政治性を見出すだけでなく, ディスクールそれ自体の持つ政治性も視野に入れるべきであり, また政治的著作についても, そのディスクールの美学的な特長により着目すべきである。

そして三番目に, ガウチョ文学がアルゼンチン・ナショナリズムを形成して行く上で果たした役割についてのさらなる研究。現在アルゼンチンの代表的な国民文学と目されているのは, 政治的にはサルミエントと敵対関係にあったホセ・エルナンデスの『マルティン・フィエロ』だが, この作品が本文で指摘したサルミエントのガウチョをタブロー化するディスクールを打破しようとするものなのか, 逆にこれと同じ働きをするものなのかを分析するのも, 重要な課題である。これに続くリカルド・グティエレスの『ドン・セグンド・ソンプラ』やボルヘスのガウチョ物なども, この観点からの分析が可能と思われる。

多方面にわたって活動をしたサルミエントのような人物を論ずることは, 専門分野の拘束を受けがちな研究者にとって, 比較的多くの困難を伴うも

のだが、それだけに大きな成果を上げる可能性も秘めているのである。

註

- 1) Anderson Imbert, Enrique, & Florit, Eugenio, *Literatura hispanoamericana: Antología e introducción histórica*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1960. p.243.
- 2) フリオ・ラモスは『ファクンド』の冒頭部分が、後に語られる歴史の解釈図式として機能していることを、第二章でのガウチョの分類図式の用いられ方を例に指摘している。これはファクンド伝の前提として配された冒頭三章全体に当てはまる。Ramos, Julio, "Saber del otro: Escritura y oralidad en el *Facundo* de D. F. Sarmiento." *Revista Iberoamericana*, 1988 abril-junio v54 (143), p. 566. 参照。
- 3) Sarmiento, Domingo Faustino, *Facundo o civilización y barbarie*, Caracas: Biblioteca Ayacucho, 1977. p. 16. なお本論文の執筆に当たっては、アヤクーチョ版とカテドラ版 (ed. de Roberto Yahni, 1993, 2a. edition) の双方を参照したが、引用は全体に明らかな誤りの少ないアヤクーチョ版に依った。なお、引用文に付された翻訳はすべて筆者の手になるものである。
- 4) *Ibid.*, pp. 23-4.
- 5) *Ibid.*, p. 24.
- 6) *Ibid.*, pp. 26-7. なお、『遺跡』からの引用はアヤクーチョ版、カテドラ版で異なっているが、どちらのヴァージョンも原書に対して正確ではない。"la pleine-lune à l'orient s'élevait sur un fond bleuâtre, aux planes rives de l'Euphrate;" というのが正しい。Volney, Constantin François Chassebœuf, *Les Ruines, ou méditation sur les révolutions des empires*. Paris: Desenne, Vol-land, Plassan, 1791. p. 4. 参照。
- 7) ルナンもまた十九世紀ラテンアメリカ思想界に大きな影響を与えたオリエンタリストの一人である。ホセ・エンリケ・ロドの『アリエル』(1900)は彼の『キャリバン』(1878)の影響下に書かれたものであり、『アリエル』をめぐる一連の論争のオリエンタリズム批判の観点からのさらなる分析が望まれる。
- 8) 『遺跡』は原始時代から近代に至る人類の歴史を概説し、文明の盛衰の原因となる宗教的対立の無意味さを指摘するという一種の啓蒙書だが、この作品と『ファクンド』にはいくつか共通点があり、前者の後者への影響がうかがえる。前者の冒頭では、パルミールの遺跡に立ち寄った語り手が、廃墟において過去の文明の破滅の原因について思いを巡らす。後者の語り手もまた、チリからロサス支配下のアルゼンチンの現状を眺めやり嘆き、

破滅の原因がどこにあったのかを追求しようとする。前者においては語り手の訴えに答えるかのように精霊が姿を現し、歴史探究のガイドの役を果たす。一方後者では、現実に姿を現すわけではないが、語り手は暗殺されたファクンドの霊を隠された真相を暴くために召還する。そして人類の歴史の総論から説き起こし、それから様々な宗教の長所短所を個別に論じてゆくという前者の構成は、アルゼンチンの自然・社会総論から入って、ファクンド個人の一代記という個別的事例の叙述へ進む後者の段取りに似ている。

『ファクンド』冒頭における霊の召還のポーズについて、ギアーノはロマン主義と同時に、サルミエントが幼少年期に親しんだであろう民間信仰の影響の可能性を示唆している。Ghiano, Juan Carlos, "Una ceremonia mágica en la composición de *Facundo*," *Sur* 1977 julio-diciembre no. 341. pp. 156-163. 参照。ゴンサーレスはこのおどろおどろしげな趣向に、連載小説という形式をとって連載された『ファクンド』への当時のヨーロッパ新聞連載小説のゴシック趣味の反映を見ている。González, Aníbal, *Journalism and the Development of Spanish American Narrative*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993. 参照。ただしヴォルネイの例でもわかるように、ゴシック趣味の社会科学的著作への影響は、サルミエントやアルゼンチンに限定されるものではない。マルクスをはじめとする十八・九世紀の政治的ディスクールへのゴシック・ロマンの影響を論じたものに、クリス・ボルディック『フランケンシュタインの影の下で』谷内田浩正・西本あづさ・山本秀行訳(国書刊行会 1996)がある。

ヴォルネイのもう一つの代表作、『エジプト・シリア紀行』(1787)がナポレオンのエジプト遠征に与えた影響については、エドワード・W. サイド『オリエンタリズム』板垣雄三・杉田英明監修 今沢紀子訳(平凡社 1993)平凡社ライブラリー版上巻 pp. 190-1 参照。

- 9) アナロジーによって結びつけられる対象やその応用の仕方こそ異なれ、外見の類似が本質の相似を証明するという発想は、サルミエント独自のものではない。ある人物の外見がどの動物に似ているかによってその性格を類推する観相学は、十八世紀後半のヨーロッパで広く受け入れられていた。高山宏「〈神の書跡〉としての顔」『アリス狩りⅢ』(青土社 1987) pp. 165-185. 参照。J. ラモスの指摘するように、『ファクンド』においても観相学的発想はキローガの野蛮さの証明のために用いられている。Ramos, *op. cit.*, p. 566. 参照。
- 10) 「文明」を自負する集団による「野蛮」領域設定の恣意性については、サイド 前掲書 上巻 p. 129-130. 参照。
- 11) Sarmiento, *op. cit.*, p. 29.

- 12) *Ibid.*, p. 30.
- 13) Ramos, *op. cit.*, pp. 554-5. ここでラモスはサルミエントのオリエンタリズムの利用を、ヨーロッパ文化に自己を重ね合わせながら、非ヨーロッパであるラテンアメリカをヨーロッパ的ディスカールの中に位置づけようとするものと考えている。サルミエントのディスカールにはもちろんこの側面があるが、同時にラテンアメリカの中にヨーロッパ的ディスカールを位置づけようとするという逆方向のベクトルも備えていることを忘れてはならない。サルミエントのオリエンタリズム的アルシーヴが、科学的な著作だけでなく、文学作品でのオリエンタ表象も含んでいることについては、ゴンサーレス・エチェバリーアも言及している。González Echevarría, Roberto, "Redescubrimiento del mundo perdido: el *Facundo* de Sarmiento." *Revista Iberoamericana*, 1988 abril-junio v54 (143), pp. 398-9. 参照。
- 14) Sarmiento, *op. cit.*, p. 60.
- 15) *Ibid.*, p. 31.
- 16) *Ibid.*, p. 31.
- 17) *Ibid.*, p. 121. 参照。サルミエントは日本の国旗を、「モロッコ同様」赤地に処刑用のナイフをあしらったものであるとしている。
- 18) Alegría, Fernando, *Nueva historia de la novela hispanoamericana*. Hanover: Ediciones del Norte, 1986. p.29.
- 19) Sarmiento, *op. cit.*, p. 39.
- 20) 国民文学に関するラテンアメリカロマン主義作家の議論については、Carilla, Emilio, *El romanticismo en la America Hispánica*. Madrid: Editorial Gredos, 1975 (3a. edición, revisado y aumentado) Tomo I, pp. 193-203 参照。
- 21) サルミエントはチリで1840年代前半、アンドレス・ベリヨを代表とする一派との間で、ロマン主義をてことしたラテンアメリカ諸国における国民文学の形成、スペインのアカデミーとは一線を画した独自の正書法の作成、そして独立以前のスペイン支配の意義の歴史的解釈をめぐって、一連の論争を行っている。これらはいずれもナショナル・アイデンティティーの確立と関連を持つテーマである。この論争の概略については、Sacks, Norman P., "Lastarria y Sarmiento: El chileno y el argentino achilenado." *Revista Iberoamericana*, 1988 abril-junio v54 (143), pp. 491-512. 参照。
- 22) サルミエントは「野蛮」によって「文明」が押し潰されているアルゼンチンの現状を嘆くと共に、このような事態を招いた責任を、パンパの近代化を推し進めずこれを一方的に搾取した、ブエノス・アイレスを始めとする都市に帰している。Sarmiento, *op. cit.*, p. 25. 参照。
- 23) *Ibid.*, p. 39.
- 24) サルミエントはラテンアメリカの自然の審美的な価値を称揚するために、

その広大さ、不安定さ、危険性とそれがもたらす精神的な高揚に言及している。Ibid., pp.40-2. 参照。彼が援用しているのは、十八世紀にヨーロッパで注目を集め、ロマン主義の重要な要素の一つとなった崇高美学である。崇高美学を理論的にとりまとめた代表的著作『崇高と美についての我々の観念の起源の哲学的研究』(1757)の著者であるエドマンド・バークは、同時にフランス革命に対して批判的立場をとった政治評論家でもある。『エドマンド・バーク著作集I』中野好之訳(みすず書房 1973)参照。崇高美学はロマン主義やゴシック小説と結びつき、従来「野蛮」とされてきた対象に美を見出していた。サルミエントにとって崇高は野蛮の特長にして文明とは相容れないものであったようで、後のヨーロッパ・アメリカ合衆国旅行においては、幻滅の対象であったヨーロッパには崇高美(sublime)を見出しているのに対し、文明の代表として高く評価したアメリカ合衆国には、この言葉をほとんど用いていない。Hozven, Roberto, "Domingo Faustino Sarmiento." *Historia de la literatura hispanoamericana*. Tomo II: *Del neoclasicismo al modernismo*. Madrid: Ediciones Catedra, 1993. pp. 427-445. 参照。

25) Ramos, *op. cit.*, pp. 566-7.

26) Sarmiento, *op. cit.*, p. 122.

27) *Ibid.*, p. 48.

28) クーパーの滅び行くものとしてのインディアン表象と現実の相違については、Slotkin, Richard, "Introduction." *Cooper, James Fenimore, The Last of the Mohicans*. New York: Penguin, 1986. pp. ix-xxviii. 参照。

29) Ramos, *op. cit.* ならびに林みどり「歴史叙述と〈法外なもの〉の在り処——一九世紀アルゼンチン思想における自己領有の問題——」『思想』第851号(1995年5月) pp. 45-65参照。

30) Ramos, *op. cit.*, p. 565.

31) なお、サルミエントのロマン主義に対する評価も、この考えを裏付けてくれる。彼はロマン主義を近代化達成のためのステップとして評価していたが、文学の最終的な目標と考えていたわけではなかった。ラテンアメリカにおいてもロマン主義は、当時すでに一時代前の文学潮流と見なされつつあった。アルベルディヤフアン・マリア・グティエレスはこれを懐古趣味として批判している。彼らに比べサルミエントはロマン主義を高く評価していたが、それはちょうどフランス革命や独立戦争と同じように、最終的には揚棄されるにしても、近代化のためにはまず完遂されるべき歴史的過程としてであった。Carilla, *op. cit.*, Tomo I, pp. 189-193. 参照。